

リニューアル版「世界の核弾頭データ」ポスター・しおりについて

私たちの住む「核兵器のある世界」の現状をよりの確に、かつわかりやすく伝えるために、核兵器廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）と長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は、2024年版「世界の核弾頭データ」ポスターの大幅なリニューアルを行いました。

以下に、新版ポスターの特徴を紹介します。

■「核軍拡の進む世界」を表現

これまでのポスターは、世界に存在する核弾頭を保有国別・種類別にアイコンで表現し、9カ国の総数を大きく表示してきました。過去11年間のポスターの総数を並べてみると、2013年の17,300発から2023年の12,520発まで、総数は一貫して減少しています。24年までの11年間の削減数は5,180発ですので、およそ3割が減ったこととなります【図1】。

核兵器をめぐる世界の状況を理解する上で、総数は引き続き重要な情報です。ポスターのキャッチコピーが訴えてきたように、核兵器は「存在する限り使われうる」ものであり、絶対に使われないという保証はその廃絶によってしか得られないからです。

しかし各国間の対立が激化し、核兵器が使用されるリスクが増大する世界情勢を背景に、減少し続ける総数を示したポスター単体では「世界の今」を的確に表現することが難しくなってきました。実際、削減数の多くの部分は、米国とロシアの2つの核大国の「退役・解体待ち弾頭」、すなわち冷戦時代に作られた老朽化した核弾頭などであり、数の減少が単純にその国の核戦力の低下・縮小を意味するわけではないからです。むしろ質的な核軍拡といえる「核兵器の近代化」の一環として核兵器の種類統合などが行われ、数としては減っているといった状況もあります。

そこで私たちが注目したのは、総数から「退役・解体待ち」弾頭数を引いた数、すなわち、配備されていていつでも使える状態にある核弾頭と、配備に備えて貯蔵されている核弾頭の数合計である「現役核弾頭数」でした。2013年から2024年の現役核弾頭数の推移をみると、2013年の10,200発から2024年の9,583発へと、削減数はわずか617発に留まります。さらに、米ロ間の新戦略兵器削減条約（新START）履行期限であった2018年を起点に明らかな増加傾向にあることがわかります。世界では核軍拡が進んでいるのです【図2】。

ただ、上述したように総数や「退役・解体待ち」弾頭数の情報は引き続き重要です。ポスターの下部に記載されているように2024年の総数は12,120発、昨年比では400発の減少となります。「退役・解体待ち」弾頭数は、RECNAウェブサイトにある「世界の核弾頭データベース」で見ることができます【別添資料】。

■各国ごとの「傾向」を明らかに

これまでのポスターでは、9カ国の保有核弾頭を、どこで使用する弾頭か（「陸」「海」「空」）及び「退役・解体待ち」という4種類のアイコンで表現してきました。そこでは単年度ごとの保有数の情報はありましたが、各国の「傾向」をとらえることは困難でした。そこで新版ポスターでは、2018年から24年の各国の現役核弾頭数の増減を弾頭数と増減率で示すことで、それぞれの国の「傾向」を明らかにしています【図3】。9カ国全体では、2018年からの6年間で332発（3.6%）の増加となっています。

加えて、2018年から24年の変化の中で明らかな傾向は、全体に占める米国の保有数の割合が減ってきていることです。6年間で米国2カ国が占める割合は88%から84%に減少、その他7カ国の割合は12%から16%に増加しました【図4】。

■ポスター単体では表現できないことも…

以上のように、「現役核弾頭数」に着目することで、新版ポスターは世界の状況をより正確に表現したものとなりました。ですが、こうした弾頭数の「量的」な変化は、核軍拡が進んでいることを示す一つの指標に過ぎないことに引き続き注意が必要です。なぜなら「質的」な軍拡は表現できていないからです。例えば米国は9カ国で唯一、現役核弾頭数を減らしています。しかし、ロシアと並び米国も、老朽化が進んだ冷戦時代の核兵器システムのアップグレードを図ろうと、莫大な予算を投じた近代化計画を進めています。さらには最先端技術を使った新型核弾頭や核ミサイルなどの開発も加速させています（こうした各国の詳しい状況については、ウェブサイトの「世界の核弾頭データベース」に解説しています）。

そこで、ポスターの内容を補足し、核兵器をめぐる世界の状況についてより正確な理解を促すために、今年は、解説「しおり」も一新します。核兵器をめぐる危機的状況に多くの注目が集まる昨今、小中学生から大人まで、さまざまな機会に学習教材として活用していただけるような資料を提供していく予定です。